

# 国際交流基金助成事業報告書

薬学部 2 年次生 石松 花蓮

## チェコ共和国にての調剤薬局インターンシップ

### 1、はじめに

2018 年 3 月 2 日より約 3 週間、チェコ共和国プラハの調剤薬局にて、インターンシップに参加した。これは、IPSF (international pharmaceutical students' association) が主催する SEP (student exchange program) である。これは、薬学生が短期または長期で海外を訪問し、自国以外の医療や文化を体験し、自国の医療の発展や学習意欲の向上をはかったプログラムである。私は過去数回、日本が海外の学生を受け入れる SEP に(そのうち 2 回は関西統括として)参加し、この企画に非常に興味を抱いていた。この興味から、今度は私が海外に行こうと、チェコでのインターンシップを決めたのである。

今回チェコでの SEP には、私を含み国外から 3 人が参加(ドイツ人、フランス人、日本人)し、チェコの友人 1 人を加え 4 人でルームシェアをした。

### 2、調剤薬局インターンシップ



(お世話になった方々と調剤薬局にて)

インターンシップを行ったのは、プラハの“Lekarna U Zlateho Lva”という調剤薬局である。一人でのインターンシップということもあり、言葉や薬学の知識の面にかかなりの不安があったが、

薬剤師やアシスタントの方に丁寧な指導をいただき、学びを得ることができた。



(薬局の外観)

#### 2-1 在庫管理

研修を行った薬局では、一日に 3 回、4 つの薬品卸売業者から商品の配達をうけていた。これらの配達品を OTC と処方薬に仕分けし、OTC の価格チェックや処方薬を棚に陳列する作業を体験した。

#### 2-2 ハンドクリームカップなどの作成

業務用の白色ワセリンやハーブが調合されたハンドクリームを 100 グラムずつ計量し、小分けのカップに分配した。当薬局では、このカップを OTC 薬として販売していた。この、軟膏をカップに移す際に軟膏ベラを使用するのはもちろんことだが、プラスチックのカードも同様に用いているのが、日本の薬局では見られない光景で印象的であった。

またこれらのクリーム類の他に、ユーカリエッセンスや消毒用低濃度エタノールを小分けにする作業を体験した。

#### 2-3 処方薬の調剤

チェコでは、医師が患者個々に見合った調合で薬を処方することがある。その薬の種類はシンプー剤、乳液、軟膏、カプセル剤、座薬と多岐にわたるが、ここではその一例として座薬を作成した体験を記載する。下記は処方箋に書かれた調合の一例である。

これは、自宅療養の末期癌患者への処方箋で、痛み止めとして服用される。

| 薬品名       | 量 (グラム) |
|-----------|---------|
| フェノバルビタール | 0.01    |
| カフェイン     | 0.10    |
| エルゴタミン    | 0.001   |
| ジアゼパム     | 0.005   |
| フェナセチン    | 0.20    |

これらに粒状のカカオオイルを一定量加え、熱して液体として混合し、それを型に流し込み、冷蔵庫で冷却して座薬とする。座薬一つ一つを包装し、ケースに詰めて完成となる。また、調剤する際には、薬剤師がインターネットや本で薬品の日最大投与量などをチェックし、処方箋の監査を行っていた。

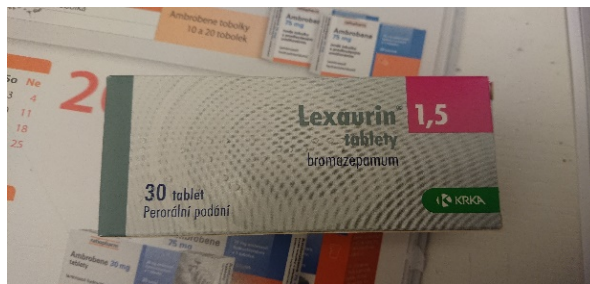


(座薬作成の様子)

## 2-4 その他

薬剤師が店頭で服薬指導をするところを見学した。このとき、日本の調剤薬局とは異なり、計数調剤をせず、錠剤やカプセルを箱のまま(もしくは水剤なら製薬企業が作成した量で)患者に手渡さなければならないことに驚いた。薬剤師は梱包された箱を開けてはならず、この規定を破ると一ヶ月程度の懲役が課されるそう。また、この制度

のために、視覚障害者の方の配慮として薬品の梱包箱には点字が打ってあることが多い。



(点字付きの梱包箱)

また、麻薬管理の方法や、EU 加盟国における薬物輸出入について、社会主義時代からの薬局経営形態の変化、チェコの医療保険制度についても指導をいただいた。

## 3、大学訪問

チェコにある薬学部はたった2つだけである。フラデツ・クローヴェにあるカレル大学薬学部とブルノにある Veterinarni A Farmaceuticka 大学薬学部である。インターンシップがない日には、これらの大学の講義棟と研究室、図書館を訪れた。

またフラデツ・クローヴェでは、現地薬学生と”インターナショナルナイト”と題したパーティーに参加し、チェコ国内外の料理や文化を持ち寄って交流した。ブルノでも、大学見学以外に、薬学生を中心とした理系学生のための舞踏会に参加した。



(カレル大学薬学部の講義棟外観)

## 4. まとめ

2年生で(語学留学などではなく)海外のインターンシップに参加する例は少ないかもしれない。

だがしかし、低学年でこのプログラムに取り組んだからこそ意味があったのだと思える。海外の薬局業務を実際体験することで、日本の薬局の魅力や課題を再発見することができたのみならず、自身の薬学・医療制度の知識不足が露呈したのである。このことによって、残り4年間の大学生活でいったい何を、どのくらい真剣に勉強せねばならないのかの指標が見え、薬学を勉強する姿勢が変化したように思える。

また、日本国外の人と接する際に、いわゆるリベラルアーツがいかに重要か実感した。そこから、医療に関することのみならず、教養として多種多様な知見を大学在籍中に得るべきだと考えるようになった。

そして、チェコ人の友人である Katerina について紹介したい。彼女は昨夏、日本の SEP にチェコから参加した。彼女は私を自国の SEP に招待してくれたのみならず、この期間私と寝食を共にしてくれた。インターンシップ前はただ一人のアジア人学生として不安を抱えていたが、彼女のおかげで不安は消え去り、この期間を楽しむことができたのである。彼女のホスピタリティーに感謝するとともに、半年前にこのプログラムにて彼女と出会えたことを喜びたい。



(二人でウィーン観光をした時に撮影)

いずれにせよ、この経験が私にとって実りのあるものであったのは確かである。薬学部のカリキュラムは多忙を極めており、このように大きな休暇を利用して海外に行くことは難しいかもしれない。だがしかし、少ない休日を使って、国内外を

問わず数日だけでも外国の学生(特に同学部の学生)と関わり合うことは非常に大切なことであると私は思う。海外インターンシップはもちろん素晴らしい体験であるし、各国の友人と話すのは日常生活に刺激を与えてくれるだろう。近いうちに、海外へいくことはできないかもしれないが、この刺激を求め、今年の夏も日本の SEP を運営してゆこうと思う。



(国内外の SEP メンバー；電車の中にて)

最後になりましたが、国際交流基金助成事業としてこの度のインターンシップを承認していただきました学生課の皆様、お力添えをいただきました先生方に感謝申し上げます。ありがとうございました。この体験を活かし、大阪薬科大学が誇れる医療人を目指して日々励んで参ります。